

武庫川臨床教育学会 ニュースレター

2025.1.17 No.27



第19回武庫川臨床教育学会研究大会のご案内(第1次案)

本年度研究大会を2025年3月に開催いたします。積極的な研究発表とご参加をお願いします。第19回大会は「臨床教育学のこれまで、これから」(仮第)をテーマに、参加者のみなさんと共に考えていきたいと思えます。シンポジウム(1)では、テーマにそってそれぞれの方の臨床教育学のイメージをパネラーから報告してもらい、講演においては庄井良信さん(日本臨床教育学会会長)から「臨床教育学とフィンランドの教育事情(仮題)」と題し、フィンランドや世界の臨床教育学の動きについて問題提起していただく予定です。今回も昨年と同じように懇親会を企画いたします。皆様、お誘いあわせの上、ぜひご参加いただきますようお願いいたします。

◆ 日時・会場

2025年3月8日(土) 10:00~17:00 (受付 9:30~) 武庫川女子大学教育研究所

※ 会場での開催を基本とします。ただし、自由研究発表のみ、対面とオンラインの同時開催とします。例年と異なり、自由研究発表を午後に行いますのでご注意ください。従来とスケジュールが異なりますのでご注意ください。

◆ 日程

9:30	10:00	12:00	12:45	13:30	15:00	17:00
受付	講演	休憩	総会	自由研究発表	シンポジウム	

終了後に懇親会を予定しています。場所は検討中です。

武庫川臨床教育学会
<http://mukogawarinkyo.com/>

〒663-8558
 兵庫県西宮市池開町 6-46
 武庫川女子大学教育研究所内

電話番号:075-922-7749 (吉益自宅)
 メール: mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

◆参加費

1000円（武庫川女子大学の学生は無料、院生・研究生は500円）当日払いです。

オンライン参加（自由研究発表のみ）の方は、ゆうちょ銀行の振替口座（口座番号：00940-3-224555、加入者名：武庫川臨床教育学会）に「研究大会参加費」と備考欄に記入の上、参加申込締切日までにご送金ください。

◆ シンポジウム・講演

（1）シンポジウム「臨床教育学と私」

武庫川の大学院に入学した動機、そこで学んだこと、そこから生まれた今の問題意識について3人の方に自由闊達に語ってもらい、会場の方との交流も踏まえ、臨床教育学と私というテーマにせまっています。

シンポジストは、長谷範子さん（名古屋女子大学）田中佑弥さん（頌栄短期大学）、田邊実香さん（関西女子短期大学）の3人です。司会進行は渡邊由之さん（東大阪大学）です。

見どころ・・・ここ数年好評のシンポジウム「臨床教育学と私」です。3人の報告・討議のあと、参加者でグループ論議をして深めたいと考えています。

（2）講演「臨床教育学とフィンランドの教育事情（仮題）」

講師：庄井良信さん（藤女子大学／日本臨床教育学会会長）

これまでの現地調査や昨年のフィンランド訪問・調査を踏まえて、フィンランドの教育をめぐる最新動向について報告して頂く予定です。北海道からお越しいただき、参加者と直接交流できるのを楽しみにいただいています。講演は午前10時から開始します。これまでとは異なる時間帯ですので、ご注意ください。

※ 天候などの関係で庄井さんが現地に参加されない場合は、会場と庄井さんをオンラインでつないで語っていただきます。この場合、参加者は会場でしか聞くことができません（ZOOM アクセス情報を参加者に送ることはできません）ので、ご理解ください。

見どころ・・・学力世界一で有名になる前からフィンランドの教育に着目され、今でも現地の研究者と研究的な親交を深めている庄井先生ならではの話になることは間違いありません。フィンランド内部にも、国際的な学力テストにおいて高水準を維持しようとする圧力があること、その一方で発達の主体としての子どものことを考えた動きがあること、ここでしか聞くことのできない話に耳を傾け、意見を交わしましょう。

◆ 自由研究発表の申込

- ① 発表時間は20分、質疑応答15分を予定しています。発表申込の〆切は2025年1月31日（金）です。E-mail: mukogawarinkyoo@yahoo.co.jp でお申し込みください。申し込みの際、お名前（所属がある場合は所属名も）、発表のタイトル、発表の方法として「会場発表」か「オンライン発表」かを明記してください。
- ② 発表要旨の提出は2025年2月11日（火）が〆切です。発表要旨はA4サイズ2枚以内で作成し（タイトル・発表者名を最初書き、ワードソフトにしたもの）提出してください。
E-mail: mukogawarinkyoo@yahoo.co.jp宛てに添付してお送りください。
- ③ 発表者には発表後のまとめの提出（1,200字程度。編集しますのでワードソフトで保存したもの）もお願いしています。〆切は2025年3月31日（月）とします。上記宛てに送信ください。

◆ 研究大会参加の方法について

- ① 事前参加申し込み制といたします。2025年2月13日（木）を〆切としますので、〆切日までに「会場参加」か「オンライン参加」かを明記して、メールまたはGoogleフォームで申し込んでください。

メール → mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

Googleフォーム →



- ② 参加申込をいただいた方には、オンラインでの参加方法、発表要旨集録をお送りします。

- ③「会場参加」「会場発表」の方は、次の点にご留意ください。

- 1) 受付では必ずお名前、電話番号の記入をお願いします。
- 2) 建物入口や会場内にアルコール消毒の場を設けますので、手指の殺菌をお願いします。
- 3) 会場内での発言は、挙手をした上でマイクを通じてお願いします。
- 4) 借用している教室以外の場所やフロアへは立ち入らないでください。

※その他、ご質問がありましたら、メール：mukogawarinkyo@yahoo.co.jp 宛てにお問い合わせください。電話の場合は吉益自宅（075-922-7749）まで。留守番電話に用件をお話してください。折り返し電話いたします。

自由研究発表に、積極的にご応募ください！

大学院生の方、会員外の方の発表も増えています。それぞれの方の問題意識の交流・発表の場にしたいと思います。オンライン同時開催をおこないます。



○ 中畑 直実さん

社会福祉法人 みやびソフィア東生駒こども園園長さんです。
会員の方の紹介で加入されました。

○ 森 祐昭（もり ゆうしょう）さん

浄久寺の住職（元常照園園長）です。
武庫川臨床教育学会には小さな学習会の後、すぐに入会していただきました。

シリーズ：私と臨床教育学⑬

臨床教育学との出会い

影浦 紀子（松山東雲女子大学）

私にとっての臨床教育学との出会いは、庄井良信先生との出会い、田中孝彦先生との出会いになります。私は大学3年生の時に庄井ゼミに入りました。庄井ゼミは、教師にとっての病院のようで、子どもと真摯に向き合う教師が集まる場でした。私は庄井ゼミで現場と当事者を大切にすること、そのために理論を大切にすることを学びました。庄井先生は、自分探しをしていた私に、アンリ・ワロンを紹介していただき、大学院進学をすすめてくださいました。ワロンは難しく、でもそのわからなさが現代的な意義を見出しやすい余白のようでもあり、どんだのめりこんでいきました。その後、私は保育士の経験を経て、大学院でアンリ・ワロンを修士論文のテーマとし、アンリ・ワロンの研究者である田中孝彦先生と出会うことができました。田中先生と出会って、心動かされたことをお伝えしたいと思います。それが、臨床的な研究者・実践者の姿勢ではないかと感じます。

一つは、「生存と発達を支える」です。臨床教育学会が立ち上げの頃のことです。設立趣意書を作成することになりました。私はレイアウトをさせてもらいました。何度も何度も趣意書を読んでいました。その中で臨床という言葉の意味として「子ども・若者やおとな・老人の生活についての理解を深め、人々の生存と発達を支えるための、総合的な人間理解・子ども理解と発達援助の学問」とありました。私は「生存と発達」という表現がとても気になって質問しました。答えは覚えていないのですが、田中先生は、他の著作の中でもしばしば「生存と発達」と表現されていました。臨床という言葉には、傷を負い病に陥った子どもや人々が意識されています。いること、あること（Be）を支えることそれは、あなたがここにいることを認め、まなざし、安心と安全を保障するケアであると感じました。

二つ目は、「自分の言葉で語る」ということです。概念や方法の検討し続けることと言い換えることができるかもしれませんが。私は論文を書くことがとても苦手でした。あるとき、田中先生にそのことを伝えたら、論文らしいものなんて書けなくていいんだとおっしゃいました。形式ではない、伝えたいことを自分の言葉で書くことが大切だとおっしゃっていました。臨床教育学はそういう学問にしていかないといけないと改めて思います。

そして「子どもの声を聴く」ことです。院生時代、臨床教育学会の前身となった科研では、北海道檜山の高校生の声、福島の母親の声、都留文科大学で学んだ卒業生の声・・・たくさんの当事者の声のテープ起こしをしました。その作業を通して、子どもの声、当事者の声を聴くことの面白さと可能性を体験しました。子ども理解のカンファレンスでは、多職種の人々によって、当事者の声が多面的多層的に描かれていくことを実感しました。この科研ではカナダ調査も同行させていただきました。20年も前の調査でしたが、当時のカナダは、今の日本と同様に、子どもたちが暴力にさらされ、教師のなり手不足に悩んでいました。その状況下でナラティブ的なアプローチで教師教育を行っている研究者がいて、スローエデュケーションを掲げている小学校がありました。そう考えると、今の子どもたちをとりまく状況下で、臨床教育学は、希望の灯になるのではないかと思います。私もその裾野で小さな支えになりたいです。

臨床教育学会に参加し、臨床教育を研究する方たちに出会うと、ああ、私はこれでいいんだ、と元気になれます。子どもの声を聴くこと、生存と成長を支えるための学問を積み重ねていくこと、そのために伝えたいことを自分の言葉で書けることを大切にしていきたいと感じます。

編集後記

▶新年あけましておめでとうございます。本号は3月の大会特集です。みなさんとの再会を楽しみにしております。今年もどうぞよろしくお願いいたします。 <文責：吉益>